

三三蔵祈雨事

建治元年六月二十二日

五十四歳

仏になるみちは善知識には^通すぎず。わが^{智慧}ちゑなにかせん。たゞ^熱あつきつめ^冷たきばかりの智慧だにも候^{そつう}ならば、善知識たひせ^大ちなり。而るに善知識に^あ値ふ事が第一^難のかたき事なり。されば仏は善知識に^あ値ふ事をば一眼^{いちげん}のかめの浮木^{ふもく}に入り、梵天^{ぼんてん}よりいとを下げて大地のはりの^{針目}めに入るにたとへ^{たま}給へり。而るに末代悪世には悪知識は大地^{だい}微塵^{みじん}よりも^多ほく、善知識は爪上^{そうじょう}の土^どよりも^少すくなし。

八七三頁

只今は本年度最後に当たる十二月度の御報恩御講を皆様方と共に読経唱題を致しまして懇ろに奉修申し上げた次第であります。

只今拝読致しました御書は、建治元(一二七五年)年六月二十二日、日蓮大聖人様が御年五十四歳の時、身延において認められ、駿河国富士郡西山(静岡県富士宮市)の地頭であつた西山入道に与えられた御書です。別名『西山殿御返事』とも称されています。

大聖人様は、本抄述作の十二日前に六月十日に、日興上人の母方の祖父である西山入道に宛てて『撰時抄』を認められ、国土の災難は時に適わぬ諸宗の謗法によることを説いたされ、特に真言宗の邪義を破折されているのであります。

本抄では、その題号が示す通り、中国の善無畏三蔵、金剛智三蔵、不空三蔵の三人による真言の祈雨によってその後には惨事が起こつた現証に事寄せられて、改めて真言が亡国の悪法であることを論じられています。

ところで本抄の御真蹟は、第二紙より第十五紙までが総本山大石寺に蔵(総本山に格護される御真蹟は、全四十七紙のうち、第十六紙から最後の四十七紙の全部で三十三紙が現存しています。第一紙から十五紙までは散失(まとまっていたものが、ばらばらになつてなくなること)しかして残っていないようです。

本抄は始めに、植えた木でも強い添木があれば大風が吹いても倒れることはなく、もともと生えていた木でも根が弱ければ倒れてしまふと仰せられ、また意気地のない者でも助ける人が強ければ倒れることはなく、少しくらい壮健な者でも独りであれば悪路で倒れてしまふという例を挙げ、仏が世に出なければ三悪道に堕ちるところを、仏を信ずる強縁によって一切衆生の多くは成仏することができたことを述べられています。次いで、阿闍世王・鴛掘摩羅の例を挙げられて、成仏のためには自分の智慧は何の役にも立たず、善知識に値うことが大事である旨を仰せられているのであります。

次に、仏法の正邪を決する基準として、道理(理証)と証文(文証)とが重要であり、さらに道理・証文よりも現証が重要であるとして三証を示されているのであります。

続いて、文永五(一二六八)年頃、東に俘囚の乱(古代末期、いったん政府統治下に入った蝦夷(の起こした反乱。俘囚とは政府側に降伏した蝦夷のこと)が起こり、西には蒙古の侵攻を目的とした使者が来たことを挙げられ、これらは正しい仏法を信じない故に起こると仰せられています。そして、真言宗で調伏が行なわれれば、インド・中国・日本の三力国のうち、インドはしばらく置き、中国・日本の二国は真言宗のために亡ぼされることになる」と述べられています。そして、真言による祈祷の例として、中国の唐代に、善無畏・金

剛智・不空の三蔵が行った祈雨は、いずれも大雨が降ったものの大風が吹いて、かえって大惨事を招いたことを述べられます。

次に、日本の例として、守敏の祈雨、弘法の祈雨について挙げられ、弘法の祈禱では雨が降らず、天皇の祈りによって降った雨を東寺(弘法)の門人が我が師の祈りによる雨としたことは、天下第一の誑惑であること。弘法には他にも弘仁九(八一八年)年の疫病払い、三鈷の松(先ごろ患者様から三本葉の松をいただきました。高野山の三鈷の松の種から育てられた希少な苗木からの松の葉だそうです。弘法大師こと空海が遣唐使の船に乗って唐(今の中国)に渡り、仏教の修行をして、日本に帰国する前に、真言密教の教えを広めるには何処がいいのか三鈷杵という密教法具を空に向かって投げたそうです。すると三鈷杵は天高く舞い上がり、日本に向かって飛んでいきました。帰国した空海が真言密教を広めるのに相応しい地を探して日本中を周っていたところ、高野山で松の木に引っかかっていた三鈷杵を見つけます。それが高野山が真言宗総本山になった由来でもあるそうです)についての不可思議の誑惑があることを述べられているのであります。

次に、中国の天台大師が陳の時代の大干魃、法華経を誦誦してたちまち雨を降させたこと。また日本の伝教大師も法華経・金光明経・仁王経の三経をもって祈雨を行い三日目に雨を降らせ、日本第一の難事であった大乘戒壇の建立を天皇より許されたことを挙げられ、これをもつて弘法の祈雨を推し量るべくであると仰せられています。

続いて、このように法華経は勝れ、真言は劣ることは明白であり、真言によって祈る日本は亡ぶであると仰せられます。さらに、後鳥羽上皇が承久の乱で敗れて隠岐島へ流されたことから、真言をもつて蒙古と俘囚とを調伏するならば日本国は負けると推する故に、身命を捨てて諫言したこと。そしてそれは中国や日本の智者が五百余年の間、一人も知り得なかった考えであることを仰せられます。

次いで、善無畏・金剛智・不空等の祈雨について、雨に大風を伴ったことを、どのように心得ればよいかとの問いを設けられ、大日経による祈雨には大きな僻事が混じっていること。そして、弘法が天皇の祈雨による雨を自らの雨と偽ったことは、善無畏等にも勝る失であると仰せられます。

さらに第一の大妄語は、弘法の自筆に「弘仁九年の春、疫病を払う祈禱を行ったところ夜中に太陽が出た」というもので、これは日蓮門家が彼らを破折する際の秘事であるから、本文を引いて相手を詰めて言うべきであり、また、これまで述べてきたことは天下第一の大事であるから、人づてに語ってはならないと誠められているのであります。次いで、今の日本も同じであるとし、弘法・慈覚・智証の三人が真言と天台との勝負に感ったことから、日本国の人々は今生には他国に攻められ、死後には悪道に堕ちると仰せられ、中国が亡び、人々が悪道に堕ちたことも善無畏・金剛智・不空の誤りによって始まったと述べられます。

また日本の天台宗も、慈覚・智証の誤りによって、本来の天台宗ではなくなったこと。さらに涅槃経・法華経の文を挙げて、末法において正法を説く者が稀であることを明示

されています。

次に、大集經・金光明經・仁王經・守護経等には「末法に正法を行ずる人が現れると、邪法の者が王臣などに訴え、王臣たちは訴えた者の言葉を信じ、一人の正法の行者を罵り、責め、流罪し、殺したりする、そうした時に、梵王・帝釈・無量の諸人・天神・地神等が、隣国の賢王の身に入り代わってその国を攻め亡ぼすであろう」と説かれていることを挙げ、今の世はこれらの経文に説かれている通りであると述べられています。最後に、各々が過去世の善根をよく知り、このたび生死の迷いを離れるよう仰せられ、さらに愚鈍の須梨槃特の成仏と、智慧ある提婆達多の墮地獄の姿が末代の今の世を表している」と述べられて、本抄を結ばれているのであります。

本抄において大聖人様は、「たゞあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たひせちなり。而るに善知識に値ふ事が第一のかたき事なり」と仰せられ、善知識に値うことの大事を仰せられています。

拝読の御文にも「仏になるみちは善知識にはすぎず」とあるように、大聖人は末法の衆生の成仏には善知識が不可欠であることを教えられています。善知識について天台大師は、外護の善知識・教授の善知識・同行の善知識・實際実相の善知識の四つを示しています。まず「外護の善知識」とは、仏道修行を外から支え、守護する人のことを、「教授の善知識」とは、正しい仏法を教え導いてくれる人のことです。そして「同行の善知識」とは、共に修行に励んでくれる人のことで、最後の「實際実相の善知識」とは、成仏の功德を与えてくれる法のことを言います。大聖人は、特に「實際実相の善知識」について「所謂南無妙法蓮華経是なり」（御講聞書・一八三七頁）と仰せられ、文底下種の南無妙法蓮華経であることを教示されています。これらの善知識に親近し、仏道修行に精進していくところに成仏があるのです。しかしまた、「善知識に値ふ事が第一のかたき事なり」と、善知識に値うこと自体が非常に難しいと仰せられています。そのなかで今私達は、最勝最高の善知識である妙法に巡り値うことができた、そのことに感謝し、一生成仏の大道を歩んでいくことが、最も肝要となるのです。

『摩訶止観』には、「知識に三種有り。一に外護、二に同行、三に教授なり」（摩訶止観弘決本 中一〇四頁）と善知識に外護、同行、教授の三つあることが説かれています。「外護の善知識」とは、文字通り総本山を外護し、寺院を外護し、妙法弘通を外護していく人を言います。「同行の善知識」は、互いに切磋琢磨し、志を齊しくして、互いに敬い重んじていく者のことです。各講中において異体同心し、よき友となつて切磋琢磨し、広宣流布のために精進していくことが大事です。講中の必要性はここにあります。そして又、「教授の善知識」とは、正法を説き、真の仏道と仏道でないものを示し、人の迷いを打ち払う善師を言います。末法においては御本仏日蓮大聖人様こそ善知識であり、第二祖日興上人をはじめとする代々の御法主上人、さらには御法主上人猊下に随順し、所属信徒を教化育成する末寺の御住職も、この教授の善知識に含まれます。

大聖人様は本抄の冒頭において、添木した植木は暴風雨に遭っても倒れず、どのよう

な悪路でも助ける人があれば倒れることがないとの譬をもつて、人生の中でどのような暴風雨に遭おうとも、どのような悪路を進むことになるうとも、信心を励まし、導いてくれる善知識に値えば、苦難を乗り越え成仏の境界に至ることができるかと仰せになっています。

そして又、大聖人様は本抄において、「日蓮仏法をこゝろみるに、道理と証文とはすぎず。又道理証文よりも現証にはすぎず」と仰せられ、道理(理証)・証文(文証)・現証の三つの証拠を仏法の正邪・浅深を決する基準として示されています。

正しい仏法を信ずれば正しい結果が現われ、誤った教えを信ずれば不幸な結果が現われることは間違いありません。かつて本宗に在籍していた者たちが、邪教徒となつて現証を強調してくることがありますが、それは表面的な魔の通力に誑かされたものであることをはつきりと教え、破折していくことが大事です。

御法主日如上人猊下は、「一人ひとりが大御本尊様への絶対的確信を持ち、一切衆生救済の大願に立つて、共に励まし合い、助け合い、折伏を実践していくなかに、真の異体同心の団結が生まれてくるのであります。つまり、理屈ではなく、互いが広布への戦いを実践するところに、真の団結が生まれてくることを忘れてはなりません」(大白法九〇九号)と御指南されています。

私たち日蓮正宗僧俗は、善知識の大事を肝に銘じ、真の異体同心の団結をもつて折伏弘通に精進してまいりましょう。

そして拝読の御文に「末代悪世には悪知識は大地微塵よりもをほく、善知識は爪上の土よりもすくなし」とあるように、世の中には悪知識の元をなす邪義邪宗が蔓延り、人々はこれに誑かされて不幸の一途を辿っています。打ち続く自然災害や戦争等による混乱、個々人の悩みや苦しみも、その根本原因は謗法にあります。だからこそ御法主日如上人猊下は、破邪顕正の折伏の大事を、何度も何度も指南されているのです。大聖人が御講聞書(御書一八三七)に「善知識と申すは日蓮等の類の事なり」と仰せのように、謗法の人を正法に導き救っていく善知識とは、私達日蓮正宗僧俗を措いて他にいません。今こそ、強い決意と行動力をもつて、果敢に折伏に挑戦してまいりましょう。

御法主日如上人御指南は「広布への戦いのなかで最も大切なことは(中略)講中一結・異体同心の盤石なる体勢を構築して折伏に打って出ることです。その盤石なる異体同心の体勢を構築していくためには、一にかかつて私ども一人ひとりの大御本尊様に対する絶対の信と妙法広布にかける断固たる決意、そしていかなる障魔も恐れぬ破邪顕正の強盛なる信心こそ最も肝要であります。」(大日蓮・令和六年十月号)と仰せであります。

「折伏前進の年」も残り僅かとなりました。現在いかなる折伏状況にあっても、不自信身命の信行にたてば、御本尊の力用と諸天の加護により道は必ず開かれていきます。

本年初頭、皆で御本尊にお誓いした折伏目標を、最後まで決して諦めずに力を振り絞って行動を起こし、何としても達成して明年「活動充実の年」を清々しく迎えようではありませんか。以上。

(令和六年十二月度 御報恩御講の砌)